

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	編輯後記
Author(s)	古賀
Citation	龍南, 239: 117-120
Issue date	1937-11-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7462
Right	

編輯後記

古賀

(私の言ひ分)

事變の勃發は豫期されて居た事ながら、我々の心情を騒然たらしめ、日本人の皮膚を變へた。ジャーナリズムはニースを求め窮然として此に應じ一大潮流を形成し、個性を失つて居た近年の傾向は益々拍車をかけられた觀がある。しかのみならず國民に迄もそれを求めた。街から街へ軍歌は響き渡り、色街からは蠻聲に交り、媚めかしい詩吟が聞える。千人力、千人針を頼む人が町角、町角に立つて居る。卷から卷一と彷徨ふ遊蕩兒にも天下驕然、非常時の來た事が眼から耳から彼の頭腦に傳はり、悲壯の感に打たれぬ事はなからうと思ふ。

かういふ時世だから、小説など書いては居られぬといふ。ちよつと聞くと尤もらしい意見をしばしば聞く。私はかういふ時世だからこそ小説はなければならぬと思ふ。小説を開人の閑仕事だと考へる誤まつた考は相當根強い。小説は堂上華族の遊蕩的教養の一であつたし、又彼等の手に委ねられ、遊女の手に残された日本の音樂と共に、藝術、乃至は文化といふものが政治的に利用するものとのみ見て來た我々の祖先が我々にもさう教へた。文學といへば、花鳥風月、でなかつたら女と酒が聯想される人は少くないであらう。政治と文學と云ふ言葉からしてさうである。趣味として文學をするといふ事が不思議とも思はれぬのがその一證據であ

る。文學はもつと時代と共に生き、人民の叫びであるものである限り、あらゆる藝術の中で最も現實的であり、實用的、現實的といふ事と、藝術的、文學的といふ事が決して對立するものではなく、反つて同じ路を歩いて居る事をこの際私は聲を大きくして云はなければならぬと思ふ。文學本來の姿が大小複雑な行動や、實際に我々の持つギヤツプに妨げられて居るのは事實であるが、それを見失ふ事は大きな過であると共に生活に對して不誠實であらう。云ひ譯はいくらもあらう。然し許さる可き事ではなく、我々の一大問題である。世は非常時である。だからこそ、デカタンの文學も必要であらう、ダダの文學も必要である。風俗文學大いに流行すべしであるとも云ひうる。非常時だからこそ、國民の本當の聲が必要であると思ふ。

私は内地を離れた事は無い。此の頃の氣候はどうであらうか。百度の極暑、零下三十度、その様に説明されても想像も出來ぬ。其處に働く兵士を他處に、ノホホンと出來る人間の顔がみたい。命を捨て、働くといふ事がどの様に苦しい事か私には理解さへ出來ぬ。一食抜いたゞけで元氣がなくなる自分を私には理解さへない。其處に働く人々が、どんな氣持で働いて居るかとか、働かされて居るかとかは問題でなく、私の胸を打つ。此の頃の戦争に關する新聞記事の如何にまづいものにも、胸のうづき悲壯の氣に打たれるであらう。此を見て平然たり得ようか。國民は皆愛へて居る。ちよつと人と會へば解る事だ。誰もが、一つの意見を持ち、議論を闘はせ、彼の地の同胞を愛へて居る。

戦争といへば昔も今も同じだと考へて居る人が多いのには驚く

ばかりである。新聞記事を見てもそれが現れて居る。此の様な事は何も戦争論は讀まずとも、近代科學の一頁も見れば判る事だ。

此の戦争の歴史的意義を理解する爲に、今迄の戦争と、今後の戦争の性質とは全然ちがつたものである事を理解すべきではなからうか。同じ海に棲むものでも鯨と章魚に何か共通したものを求めるのは無理であらう。

世は正に非常時である。日本の人民はその敵に向つて當らねばならぬ。美名に隠れた劃一主義、順應主義を怖れねばならぬ。一部の軍人や政治家にのみ委ねるべきではない。人民の一大重大事である。此の際人民は我に歸るべきである。人民は「Push, this end, よりも必ずしも「Pull, this end」(私はよく此をトツパンデルゴと讀み違へる。)が日本的でもあるまいと云ふ事を理解すべきである。非常時、非常時と聲を大にして叫ぶのもよい。然し、逆上して目まひを起すのは決して大國民の態度ではなからう。出兵すると共に戦争が始まり、軍隊を引き上げると共に平和が来るものでもあるまい。それを、軍人が兵器を手にした時始めて戦争だと氣づく程間抜けであつて、いのだらうか。

私には日本が今危機に直面して居るとしか思へない。その時、我々はこんな態度でいゝのかと思ふ。國防献金ばかりが能でもあるまい。

此の時に當り、學校はどうであらうか。學問を遊んだり、生活を遊んだりして居る人がないと言ひ得るだらうか。私は甚だ心もとない。もつと行動的であり、もつと積極的であるといふ事がそれ程難かしい事であらうか。人間が劃一化され、無内容になつて

行つてないと斷言し得る人があるか。此の世紀は概念の時代だと叫んだ男が居た。それは此の様な事を意味するものとしたら、實際なきけない話ではないか。我々はつまらぬかもしれない。然しつまらぬ人間に安住が出来るかどうかが問題だ。生活の爲に、生きる爲にとうまい言い譯はある。だが、生活の爲に、生きる爲に智能と肉體と時間の切り賣りが止む得ぬ場合もあらうし、その例は多い。だが、一つ一つ賣つて行つて尙も賣る事の出来ぬものがある筈である。賣れるだけ賣りつくして後に残つた、賣る事の出来ぬものが問題である。かう説く私は、甘くて、若いのであらうか。今度原稿を集めて、思はぬ私人の登場を見た。その作品は未熟ではあつた。然し。その人々の積極性がうれしかつた。それが意外な人々であつただけに尙うれしかつた。然し、彼等も文學を遊ばうとする傾向が多分にあつた事は否定出来なかつた。待つて居たら誰かが出て來るといふ望が全く斷たんとする際であつたから尙一層強かつた。まさか、人間の屑ばかりを集めた學校でもあるまい。私は、偉大な人物の登場を待つて居る。其の時にはいさぎよく彼に彼を乞ひ、共に――又は導かれて文學に進み、文學と闘ひ、最後の突撃を試みようと思ふ。龍南が日に日に落魄し、孤独の感が深い。五十年が五高生に何を與へたか。何は、一學期に話した彼の杞憂が實際に現はれたのではないかと思ふ。時代に超越するといふ事が、現實に足場を失つた時代錯誤であり、時代に順應するといふ事が、五十圓のサラリーマンが、最新流行のスタイルで、街から街へと肩で風を切つて遊びまはるといふ正に奇蹟的な生活であると考へられて居はしまいか。さうでなかつた

ら幸である。正に此處にも非常時の風が忍び込んで来て居る。

古今未曾有の大暴風雨によつて混亂に陥つた此の現實と聞ふべきではなからうか。徒らに現實から逃避しようとするのが正しい生活とは考へられない。いかに青年が、侮蔑されようと、次の時代は青年の時代でなければならぬ。現實の苦しさに壓しひしがれ、盲従を敢へてするならば、次の時代の青年にも又此の苦しさを味はさなければならぬ。現實が苦しいだけ闘ふのが我々の義務であり責任でもあらう。でなかつたら、次の時代の青年が、我々に如何なる侮蔑を與へ、あまつさへ、顔に痰をかけようとも、それを、甘んじて受けねばなるまい。

起つべし、起つべしである。正に五高生奮起すべきの時である。ブチ、ブル的我利々々主義をふり捨てるべきの秋である。諸君の胸奥に集くふ叛逆の精神はどうした。野性を誇る五高生は、不潔な手拭を腰にぶらつかせ、木刀を手にして得々とすべき時であらうか。起つべし、起つべし。小さくとも龍南を守り育てゝ行かうではないか。讀み、考へ、書く。自分を大きなものに育て上げて行かうではないか。盲従から覺め、龍南の黄金時代を作らう。回顧趣味は止め給へ、爺むさい老人趣味や若い女の鼻息を覗ふ事は止めよう。外部の人々は嗤ふぞ。現實の荒波にたゞきつけられる事なく、毅然と溜歩しよう。身分に甘へず堂々と進んで行かう。温床は結局温床であるから。其の時にこそ、人間が、續々と現れて来るであらう。

集つた作品に對しては何とも云へぬといふのが本音であらう。

一應讀める作品だけは門前教授に審査を御願ひした。それ以外の作品については或男は龍南を侮蔑するも甚しいと怒つた。或はさうかも知れぬが彼等の積極性を貰ふ。此の位のものだらうとは思つて居た。私がかう云つても怒らぬのなら又何をか云はんやである。私を怒り大いに努力して次には素晴らしい作品を出して呉れ給へ。待つてゐる。

作品を見てすぐに感じた事は、自分の思想なり何なりを既成の型にあてはめようと努力した跡があり／＼と見えた。特に詩や短歌に著しかつた。勿論此等がスタイルに拘束される程度は強い。詩も俳句も駄目な私にさへ拙い事は一眼で判つた。又中にはスタイルさへ整へばそれは詩であり短歌であると考へて居る人が居た。いくらスタイルで誤魔化さうとその無内容は蔽ひ切れるものではない。ポエジーの無い詩を發見した。後者の場合は問題とさへ出来ぬ。勉強第一である。前者の場合に就て云へば、我々が今感じ、今考へて居る事が、三十年、四十年、又は千年も以前のそれと同じではない。そのスタイルが原始的な内容しか盛り得ぬものなら、その人がつまらぬか、そのスタイルが捨て去らるべきかであらう。古い革袋には新しい酒は盛れぬといふ言葉には多分の眞實を含んで居ると思ふ。だからと云つて新しいスタイルには必ず新しい内容が盛られて居るといふのではない。その好い一例がある。現代の若い層、(例へば我々學生、サラリーマン等)に大膽不敵な調子外れの言葉の混亂がその例である。「斷然好き」「モチ」「OK」「女の使ふ」「ボク」「キミ」と喋る連中が、今尙古いスタイルを取つてゐる作家よりも、行動的であり、傳統破壊に勇敢で

あり、而して新しい内容を持つて居るとは云へまいと思ふ。要は彼等の勉強に待つより外はない。

次には對象を正密に觀察する事よりも、その表現に焦りぬいて居る。正に現代作家の逆を行つて居る。無内容をその表現でごまかさうとして居ると云はれても仕方あるまい。觀察すると云つても、徒らに浮薄な現實の表皮をいくらスケッチした處で、傑作も生れはしなからう。映畫スターの消長と白粉會社の宣傳ビラで變る所謂新しい女の表情をいくら描いたからとて風俗文學の傑作が生れるものでもなからう。然し、表現に努力して居るばかりなのは、大正初期の龍之介、寛の亜流かと思へる。私は觀察に惱まぬ彼等がうらやましくもある。でなかつたら近頃の老大家と稱される作家の陥つて行つた陥穽に自發的に突撃を企てたのであらうか。現實の惨めさを夢にしようとする自己欺瞞は止したがよからうと思ふ。

色々不平はある。しかし一番つらいのは何等批判精神がないといふ事であつた。作者の不平不満や、惚け話を讀まされ、然も何の爲に書かれたのか判らぬ作品は途中でしばしば、眞に氣をうばはれ勝であつた。餘りにも主觀的な饒舌といふものは聞くにたへないと歎ずるのは私ばかりでもあるまい。老人の繰言、子供の我儘、青年の駄法螺。共に手を焼くものである。自分にもつと冷酷であつてほしい。此觀察不充分によるものと思はれた。他人を理解するのは難かしい。それと同様に自分を理解する事も難かしい。以上の事は何れも不勉強によるものと思はれた。

最後に發行を後らせて申し譯なし、私の不明を恥じ入ります。